ぼくたちの家音

かおりん

あんぷらぐ
荒縄工房

SM小説

ぼくたちの家畜かおりん

あんぷらぐ著

荒縄工房・発行

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐ

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より「あんぷらぐど」名義で独自の自虐的ＳＭ小説、伝奇ＳＭ小説などを発表。二〇一九年「あんぷらぐ」に改名。東京在住。

目次

命令 6
訊問 31
美尻 56
到達 85
宣言 112
学校 139
立場 165
公認 189
仕置 214
同盟 241
露出 265

激情　292
厳罰　328
解剖　357
日々　385
実験　420
終章　444
奥付　457

命令

「かおりん」

あの二人が、笑顔でやってきました。大熊克也様と向井学様。成績優秀な学生です。お金持ちの家に生まれ、家庭教師がつき、ストレスの中でがんばってきた子たち。

ですが、私にとっては悪魔です。

彼らは背丈は私の肩までしかないぐらいですが、反抗することは許されません。

膝が震えています。なんとか笑顔を保ちます。誰が見ているかもわからない校内で、笑顔で彼らに接しな

かったときは、罰がとても厳しいものになるのです。
「いいつけ、守ってる？」
「はい」
「じゃ、見せて」
いつでも、どこでも。命令には逆らわず、笑顔で喜んで対応すること。
毎日のように、彼らとの約束事は増えていきます。私の部屋の壁に、彼らが直接、マジックで書いていきます。
部屋と言っても……。
私が借りていたアパートは彼らが使っていて、私は別の部屋に住んでいます。彼らが用意してくれた部屋

です。そのことは、学校の誰も知りません。
「早く！　早くしてよ、かおりん」
「はい」
スカートの裾をつかみ、引き上げていきます。
「まだまだ」
腿が露わになり、ついで下着をつけていない股間が剥き出しになります。ローターが膣に入っていて、その電池ボックスがガムテープで腿に留めてあります。ガムテープは股間にもついていて、ビニール袋が恥丘に取り付けてあります。おしっこや淫らな液をそこに溜めるのです。
「あんまり溜まっていないね」

「ボタンを押してあげるよ」
「あ、そんな……」
克也様の細い人差し指が、一直線にクレバスの上部にひっそり隠れている陰核に向けられます。
「そ、そこは……」
「ふふふ」と彼が笑いながらぐいっと指先を押し込む。
「はあっ」
ポタポタとビニール袋に淫液が滴り落ちていくのです。
「相変わらずスケベなマンコ」
「そろそろまた剃らないとだめだよ」
陰毛を伸ばしてはいけないと命じられています。で

すが、濃い方なので頻繁に剃らなければなりません。カミソリで剃るように言われて、そのせいか肌が赤みがかり、あまりにも淫らに薄汚れていくのです。恥ずかしくて、誰かに見せられるようなものではありません。

「なかなか溜まっていかないね。今日はまだ潮吹きしていなのかな。後ろを見せて」

「はい」

そのままくるりと回り、お尻を向けます。

「突き出して見せろよ、かおりん。っていうかここは学校だものな。酒井先生」

「ああああん」

「少しは色っぽくなったかな」と尻をムギュッとつかまれます。
「もっと鍛えないとね。もっとデカ尻にならないとダメだよ」
「はい」
肛門には柔らかな素材の緑とピンクの蛍光色のスティックが入っています。突き出すと、ぬるっと飛び出し、ブラブラと出ています。
「奥まで入れないと落ちちゃう」
「はい」
自分でスティックを中に押し込みます。
「うううんん」

中から突き上げられて、ぎゅっと膣が締まり、愛液がだらりと垂れました。
「酒井先生って、すごいスケベだから、すぐ感じちゃうね」
誰が来るかわからない校内ですが、逃げることは許されません。いつまでも下半身を彼らに見せていなければなりません。勝手に途中でやめたら、恐ろしいことになるのです。
「かおりん、放課後までに、ビニール袋をいっぱいにしておくんだよ」
「はい」
すべては、頭のいい彼らの仕組んだ罠だったのです

が、やすやすとそれに乗ってしまった自分のうかつさを恨むしかありません。

先週のことでした。

「どうしたの、大熊君」

この頃はまだ彼らを「君」で呼んでいました。

珍しく学校を休んだので、彼の親友である向井君、いえ、学様に尋ねたのです。

「原因不明の高熱なんです。だけど、彼の両親はいま海外に出張しているでしょ。お手伝いさんがいるけど、心細いんじゃないか。さっきメッセージが来て寂しい、先生に会いたいって。ほら、見て」

学生の間で当たり前に使われているスマホ。画面に克也様のメッセージが並んでいました。
「先生、もしよかったら、行ってみてよ」
「わかった。行きましょう」
忙しいとはいえ、学生とこうした親密なつながりを持つことは、新任の教師にとっても重要なことです。教頭に相談するともちろん「行ってきなさい」と言われました。「大熊さんは実力者だからね、学校にとっても大切な父兄なんだから」と。
克也様の家は中がよく見えないほど高い木々に囲まれたコンクリートの三階建ての瀟洒な建物です。
「克也君の部屋はこっちだよ」

学様はよく知っているようで案内してくれました。吹き抜けの玄関から、パーティーのできそうな部屋を抜けて廊下を通り、彼の部屋に入ったのです。三ＬＤＫぐらいの広さがあります。うらやましいほど広いリビングがあり、大型テレビ、ゲーム、本棚、ソファーなどがありました。

「こっちだよ」

ドアを開けると寝室やバスルーム、そしてウッドデッキが見えています。デッキの横には木造の低い小屋があります。大型の犬でも飼っているのでしょうか。

夢のような屋敷です。

キングサイズのベッドに大熊君は寝ていました。ふ

かふかの羽毛布団の中から顔を出しています。熱があるらしく額にヒンヤリするシートをつけていますが、いかにも放置されている感じです。

「大丈夫？」

ベッドサイドへ行くと、彼は目を薄く開けて「ダメかもしれない」と弱々しくつぶやきます。

「なに言ってるの。しっかりして。お医者様は？」

彼は首を振ります。

「すぐ呼びましょう。救急車の方がいいかしら」

スマホでどこかに連絡しようと思ったのです。

その手を大熊君がいきなり握ってきました。

「先生、苦しい。お願いだから、ちょっと、胸をさす

って……」
「え？　大丈夫？」
厚みのわりには驚くほど軽い布団をはだけると、彼は全裸で寝ていたのです。
「ダメじゃない、パジャマを着ないと……」
「熱があるからだよ」と向井君。
「でも、そんなのダメよ」
「はやく、さすって……」
彼は痩せて、思ったよりは筋肉質。白い肌が若々しくまぶしく見えます。
手をその胸にあてました。ドキドキしているのがわかります。熱い。とはいえ熱があるほどではなく、意

外でした。まだこのときは仮病だとは気づかなかったのです。

向井君がそのとき、後ろから私を押したので、ベッドに躓くように大熊君の上に被さってしまいました。

そのとき左手が彼の股間に当たりそうになって、慌てて避けたため、上半身は彼の上にぶつかりました。

その時、ドアが開きました。

「まあ、克也様！」

振り向くと、中年の女性が立っていました。痩せこけて白髪です。険しい目つきで私を睨み、筋ばった腕で私の手を掴むと「汚らわしい、どきなさい！」と怒鳴りました。

両親は海外だと聞いていたので、この人は母親なのか、祖母なのかと考えていて、なにも答えられませんでした。
引きずられるように床に正座するようなかっこうになりました。
「どうしたんですか、克也様」
「先生なの。学校の先生が、どこか悪いところがあるか診てあげるって」
「まあ、裸じゃないの！　このスケベ女が！　克也様になにをしたの！」
「なにもしません」
「いえ、これは立派な犯罪です！　警察を呼びましょ

う」
最初はこの女が誰かもわからず、なんでいきなり私を悪者にするのかもわからず、反論さえできずにいました。
向井君がすべてを知っているので、安心していた面もあったのです。
しかし、彼が言った一言が私の耳に突き刺さりました。
「写真を撮ってたんだよ、ほら」
いつの間にか、私のスマホは向井君の手にあって、それを高く掲げていたのです。
「まあ。破廉恥！　恐ろしい！」

叫ぶ老女。
「あなたは、誰なんですか！」と私も思わず怒鳴り返していました。
「おだまり！」
その女に頬を思いきり、ひっぱたかれました。
「私は学校の教師です！」
「破廉恥教師！　教え子を裸にして写真を撮るなんて酷すぎる。決して許されるものではありません！」
「そんなことはしていません」
「しているじゃないですか！」
女の手に渡った私のスマホ。その画面に裸の大熊君の姿が何枚も。そして彼に被さる私の姿。

なんといってもいつの間に用意されたのか、裏返しになった布団の上に、男子の下着や靴下が乱雑に置かれているのです。

いま、私が彼を裸にしたように見えるのです。

とんでもなくいやらしいことをしている映像にしか見えません。まるで、彼のペニスを求めてむしゃぶりついているかのように。

おまけに焦っていたこともあるのでしょうが、私の表情は薄笑いに見えています。焦っていただけで、笑うつもりなどありませんでした。

でも、写真を見れば、誰しもが教え子の体を求めている変態教師と断じるでしょう。

「警察を呼びます」
「なにをおっしゃってるんですか。大熊君が病気だから見舞いに来ただけです」
「克也様は病気ではありません。病気だとしても、裸にする必要なんてあるわけないでしょう！」
「もちろんです。彼はすでに裸になっていて……」
バシンとさらに力強い平手が、私の頬を襲いました。
クラッとして、床に倒れていました。
「病気だなんて、言ってませんよ」と学様まで……。
「先生が、大熊君に会いたいっていうから連れてきただけです」
「そんな……」

「あなたは教師としてあるまじきことをしたんですよ。克也様のお友だちまで巻き込むなんて……」
「違います。誤解です。ちゃんとお話をしましょう。失礼ですが、あなたはどちら様ですか」
「大熊家にお仕えして二十年になります。柴田光江と申します。ご両親が不在のときは、私が責任者です。学校にもその旨、お伝えしております。この件は警察に届けることにいたします。話をされたいのなら警察で話せばいいでしょう。二度とあなたのような破廉恥教師は、生徒の前に立つことのないようにしなければなりません！」
五十代後半ぐらいでしょうか。厳しい顔付きの柴田

光江。
このまま警察に連れて行かれたとして、どう説明すればいいのか、わかりません。
大熊君の額にあった熱用のシートは見当たりません。彼が病気だった形跡はどこにもないのです。
「でも」と家政婦の柴田さんが、つぶやきました。「警察沙汰になれば、大熊様の名が出ないとも限りません。ここは冷静に考えたほうがいいかもしれませんね」
冷たい彼女の表情には取りつく島もなかったのですが、警察沙汰にしないでくれるのなら、とそこに私は飛びついてしまいました。
「ええ、そうですわ。そういう話ではそもそもないの

ですから」と私。
「先生は、克也が好きで好きでしょうがないって言ってたよね」
「向井君！」
彼は笑いながら嘘をついています。
「まさか！」
無表情から怒りの表情に。柴田さんの態度も変化しました。かえって厳しくなってしまいました。
「年下が好きな変態女教師！　教え子に手を出すなんて、許されません。まして克也様が嫌がっているのに」
「ゴメン、克也。先生に脅されて、どうしても連れて

来なくちゃいけなかったんだよ。ぼくの成績を全部最低ランクにするって脅されたんだから」

学様はわざとらしく泣きはじめるのです。

「そんなこと、言ってません……」

完全に罠にかかった気がしました。現実として誰かの成績を私情から落とすことなどはできませんが、教え子に対する脅しとしては成立するかもしれません。

学生のすることですから、ある程度の悪ふざけは覚悟しています。でも、これはあまりにも非常識で狡猾です。

大学を出てまだ三年。教員として半人前で、やっと正規の教員としてこの学校に採用されたのです。いま

妙な話が出れば、教員としての道が閉ざされてしまうかもしれません。それどころか、犯罪者にされてしまうかもしれないのです。

「つまり、あなたは職権を利用して向井さんを脅迫し、克也様の家に侵入すると、克也様を強引に誘惑して、性的ないたずらをしようとしたわけですね。自分の欲望のために？」

「ひっ」

柴田さんが私の髪を掴みました。

そんな話はとうてい受け入れられません。

「ちがいます！　そんなことしません！」

「じゃあ、この写真はなに！　どうして克也様が裸に

されているの！」
　状況は不利です。事実として裸の大熊君がベッドにいる。そこに私がいる。向井君が案内して入れてくれたのですが、そもそも向井君がカギを持っていることも不思議といえば不思議でした。
「向井君、カギはどうしたの！」と私は彼にすがりました。彼が正直に言えばすべて解決するのです。
「先生に、スキをみて克也のカギを盗めと言われたんです。合い鍵を作るからって……」と、さらにわざとらしく大声で泣き始めました。
「なんてこと！　史上最悪の破廉恥行為だわ。計画的。学生を騙して誘惑して自分のドス黒い欲望を満たす。

こんな女、許せません！」
私も「ちがう！」と怒鳴っていましたが、柴田さんも怒鳴っていました。
「先生という学生にとっては絶対的な地位をそこまで悪用したんですか。性根の腐った女！」
髪の毛を掴み、ぐいぐいと頭を左右に揺さぶるので、その手を私も掴みますが、立ち上がることができません。

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇二二年四月刊行　第一版

著作権　あんぷらぐ（あんぷらぐど）（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。